

国分寺市図書館運営協議会 第6期第1回定例会要点記録

日時 平成28年12月20日(水) 午前9時30分から11時30分
場所 ひかりプラザ5階資料室
欠席 0人 傍聴 0人

事務局：開始する。配布しているレジメに沿って進めていく予定だったが、本日、教育長と課長が議会の方へ出席するため、こちらには出られなくなったので、委嘱状の伝達式と教育長あいさつは次回にする。

事務局：では、全員自己紹介をお願いします。

委員：継続、利用者の視点を大事にしながらやっていきたい。

委員：おはなし会をやっている。本多図書館で30数年、民生委員もやっている。

委員：継続2期目、小平市で図書館勤務していた。仕事と利用者の2つの視点で参加したい。委託問題、図書館評価等で深い勉強をした。この協議会は素晴らしい、活発な会で、会長の采配で安心して意見も沢山出せた。国分寺の図書館を盛り上げるため、図書館ファーストということで、国分寺の図書館が東京一、日本一、いや世界一の図書館になるように気持ちだけは頑張っていきたい。

委員：ISOの審査委員をやっていた。ISO800事業所の業績の点検などをしながら良い環境を維持していく仕事をしている。

委員：継続、3期目、調布市図書館長、白百合女子大で図書館学を講義していた。現在非常勤講師をやっている。国分寺の図書館は特徴のある図書館、日本一、いや世界一の図書館という話があったが、それになるような条件はある。後はそれに肉付けをどういうふうにしていくかとか、骨格をどういうふうに作り上げていくかとかをしっかりとやれば、文字通りそういうようになっていくだろう。今、国分寺の駅前が大変なことになっていて、国分寺市はこれから大きく変わろうとしている時なので、図書館もそれに負けないくらいの勢いで何かやっていかなければいけないと思っている。

委員：元立川市図書館長だった、3期目になる。お寺回りが好きで、寺探訪の自費出版をした。国分寺市図書館は特徴のある図書館であり、多摩地域の図書館として国分寺らしさや、国分寺の色みみたいなものを出していければと思う。

委員：障害者団体からきた。障害のある人が図書館を利用するという観点から意見を言っていきたい。

委員：一小PTAからきた。子どもでも本の好きな子、そうでない子もいる。仕事でも本に携わっている。

事務局：次に事務局職員の紹介をする。ー略ー

事務局：次に会長、副会長の選出にはいる。まず自薦、他薦あれば。

—なし—

事務局：ないようなので、事務局から提案で、再度継続ということではどうか。

＝異議なしの声＝

事務局：それではそのように決定し、お二人に会長、副会長席へ。

会長：それでは会長をやらせて頂くことになった。よろしく。これから国分寺市図書館を良くしていく、盛りたてていく。

副会長：いろいろなこと、感じたことを言ってほしい。それが国分寺市図書館の発展に繋がるという目標に向かっていこう、和気あいあいの素晴らしい協議会にしていきたいと思います。

会長：では本題に入る。事務局のほうから資料説明をお願いしたい。

事務局：—説明— 審議の進め方について、まず今年度は国分寺市図書館計画を作ろうという話があったが、それは難しいので、6期では国分寺市図書館基本方針を定めていくということで、考えている。都立多摩図書館がオープンするし、それを含めて都立高校、小中学校等との連携等を含めたもので、基本方針を定めていければと考えている。こちらの骨子は事務局の方で原案を提示し、それについて協議してもらえたらと思う。まず、図書館運営協議会について簡単に説明したい。

—説明—

国分寺市の場合は、図書館ではなく、教育委員会が設置するという事になっている。教育委員会の諮問に対して、教育委員会に答申するという、教育委員会に議案として出すことができる、図書館運営に関する重要事項については、教育委員会に建議することもできる、図書館法の図書館運営協議会よりは少し力の強いものになっている。図書館運営協議会は全て公開になっている。市民公募委員が半数で多くなっている。この第6期も図書館評価を行う。平成30年度に平成29年度事業の評価を行う。

—資料の説明—

会長：図書館運営協議会は何をするのかなということが一番大事なことで、国分寺市の場合は、図書館法で言う図書館運営協議会とは若干違った位置づけのものになっている。図書館法では図書館長の諮問機関になっていて、図書館長が様々な業務に対して図書館運営協議会に諮問をして、それに対して検討して答申するというものだが、国分寺市の場合はその上の段階で教育委員会が諮問をして教育委員会に答申するという位置づけだ。元々こういう運営協議会の位置づけというものは、いわば市民参加の運営ということが一番大きな問題としてある。一般の市民の声を図書館に届けるというのはなかなか難しい中で、公民館の場合もそうなのだが、公民館運営審議会というものがある。公民館の運営に関する事を審議するというのがある。図書館では図書館運営協議会が図書館に関する事に対して様々な意見を出して答申をする。それだけではなく、運営協議会が独自に建議をする。要するに提言をすることもできる。い

わば我々は市民サイドに立った視点で図書館を見て、図書館の運営についてなにが望ましいのかということが問われる。より良い図書館運営をするためにはどうしたら良いのか、往々にして運営協議会と事務局とが対立するという構図が出来てしまうところがなくはないのだが、私はむしろ図書館を応援するとか支援するとかを基本認識として運営協議会を位置づけていったほうが相乗効果が生まれるのではないかと思う。今までもそういう形で批判をするというよりか、積極的な提言をすることにより、図書館運営がうまくいくという意見をあげられれば良いと思う。その時には、いろいろな目線がある。先程の自己紹介の中でもあったが、読み聞かせや子どもを対象としたサークルをやっているとか、ISO800 事業所の業績の点検をして良い環境を維持していく仕事をしているとか、小中学校のPTA連合会とか障害者サービスなど。まだまだいろいろな問題があつて、なかなか理解されにくいところもある。そういうことも皆さんで共有できればいい。2期目、3期目の人もおり、返り咲いた人もいるが、ざっくばらんにいろいろな意見が出せればいい。これまでの国分寺市図書館の状況を説明してもらったが、これからはフリートーキングということで、情報交換をしてもらったらどうか。皆さん一人一人と国分寺市図書館との関わり、運営協議会のイメージとか、ざっくばらんにフリーで日頃図書館を利用して気付いた事だとか、して欲しい事だとか、また事務局の方も出た意見を控えてもらって今後の協議会運営に役立っていけるようなものも出て来るかも知れないので、お互い委員同士の話でもいいし、職員も交って図書館のことを話せば面白いと思うので、国分寺市図書館について、あるいは自分がどういうふうに関わっているのかとか、どんなふうに使っているのか、気が付いたことなどどうか。

委員：一部業務委託というが、なぜ、何のために行っているのか。

会長：委託を実施している光図書館の館長から説明を。

事務局：経費削減とより効率化のために実施している。－省略－

委員：削減になっているのか。

会長：多くの自治体で経費削減と行財政改革の一環の中でいかに税金を有効に使うかという中で、経費削減と職員の削減ということを適切に図っていかないと、これからの自治体自体の運営がなかなか難しくなっていくということがあり、直営でやっている図書館も当然あるが、それは自治体の中の優先順位によって変わってくるということだ。国分寺市の場合には、むしろそのアウトソーシングを全課をあげて取り組みをやっていきたいという方針があり、それに図書館も右に倣えということでいかなないとなかなか業務が進んでいかないという中で、我々サイドからするとある意味押しつけられたという感じがどうしてもあるが、運営協議会のスタンスはそれに関して基本は反対の表明をしたが、実際にはなかなか国分寺市の総体の中では通らない。条件付きのような形で止むを得ないという形で了承したという経緯がある。そのやむを得ないという中で、条件付きで極力今までの姿勢を残していく。残してい

く中で最低限のアウトソーシングをするということで、窓口業務だけを取り敢えずする、基本は職員が残って基本業務を進めていくという方針を決めていった。もともと教育委員会自体のアウトソーシングについては、あまり積極的ではなかった。全体的な流れの中で受け入れざるを得ないとなった。それで、これからどうするかについては、本多を除いた全館にするかという第二の山場が今期の運営協議会の課題に出てくるが、そのことについてもどうするかということがある。実際に委託の状況を聞いてみたりすると、大きな問題は今のところ起きていないようだが、我々が危惧しているのは、今の時点のことではなく、将来的に今の各分館の館長さん達が定年を迎えてやめていくという時に、次の世代がいかにして育っていくのかということ、その辺の問題を長期的に見ていくと、やはり図書館業務というのは窓口がかなり重要な要素を占めている。というのは利用者と直接接し、利用者の要求など様々なことをいろいろな形で職員とコミュニケーションを図りながらやっていくという中では、窓口業務というのは大事なのだ。それをアウトソーシングしてしまうというのは殆ど後方部隊で何かをするというやり方でしかない。現場の職員は、それを何とかクリアーして次の世代に引き継いでいくという努力を今もしていると思うが、そういう中でのせめぎあいというか、どういうふうに進んでいくのかなという点を注目していかなければいけない。

委員：一部委託されたらどうしようと思ったが、先日紙芝居をやりたいと光図書館へ行ったら、対応が非常にスムーズで、気持ちのいい対応をしてくれて、終わったら終わった時にどうでしたかと、子どもの反応はどうでしたかといろいろな事を聞いてくれて、借りる時もどういうふうにするかとか、対応が今までより良いような、私も久しぶりに光図書館を利用したもので、職員の人がよく指導しているのだなと思、これでいいのではというふうに皆がなっていくのではないか。裏でいろいろ心配されている職員の思いというのは一般市民のそれとはやはり少しかけ離れていってしまうのかなと思ったりもした。窓口がスムーズにいき本屋さんみたいになると、職員の人思いと逆の方向に行くのかと悩む。一般市民の使う側の人にとって、委託でもないのではないか、ということになってしまうとこれまた問題になるのではと思う。そういう所の架け橋になって私は忌憚のない意見を申し上げられると思った。

公民館はよく利用しているので、中味はよく知っているつもりだが、図書館はあまり詳しくなく、読み聞かせをしているだけで三十数年もやっていると制度も変わってきて、職員が変わったり、今までやってきたことがダメですよとなったり、ダメと言っていた事が良くなったり、今はどういうようなものが求められているか、どういうふうにしなくてはいけないのか、ここで考えさせてもらえればいいのかと思う。

会長：市民目線というか利用者目線でいうとそんなに問題は見えてこない。むしろ良かったという印象を持つこともあるかなと思う。これは、一つはやはり図書館職員の対応、

利用者に対する対応がしっかりとそういうようになるが、そうでない自治体も結構あってそれは委託業者の方の派遣の体制自体が話を聞いてみると国分寺の場合は人が殆ど変わらないという状況があって、ある意味そこで鍛えられていい人材を派遣してきているようだ、要するに図書館サービスは人なのですよね、人がいかにその人が図書館を理解して痒いところまで手が届くというようなサービスができるかどうか、はその人の度量にかかってくるので、受け入れ側の体制がしっかりしていれば、それなりの人材を派遣会社も出してくれる。悪い例もいっぱいある。1ヶ月もしない内に人がコロコロ変わってしまうとか、直営館では有り得ないような悪い状況が実際にあったりするので、それは受け入れする側の体制がある程度しっかりしていれば、それなりの人が来てくれる。その人たちも図書館サービスということに対してやはり真剣に考えていかなければ続けていけないということになるので、それは図書館職員の資質より良くもなれば悪くもなるということがある。それをどう維持していくのかがこれからの課題である。今までの職員は長年図書館で経験を積んできているのだから、窓口のことも分かっている。これから窓口に出ない職員が増えてくると、そういう事が分らずおやっというようなことも起きる。そこをどうするかということが課題だ。今は比較的うまくいっているが、職員の方が気を使って失敗しないようなやり方をとっているなどと思うが、長期的に見ないと良い悪いは分からないということもある。その意味では、一般市民からすると良くなったというイメージが出るが、利用者の方も当面は頑張ろうという気はするが、だんだん裏の話をすると、やっぱり低賃金という問題がどうしても出てきて、辞めざるを得ないということになってくると、どんどん人が変わらざるを得ないということになって来る。その辺のことも行政はどう見極めるかということが大事だ、その辺のことも我々自身も少し心しておくことが必要だ。

委員：2つある。1つは図書館の役割とか機能が社会の動きの中でどんどん変わってきている。最近の新しい話題では東北のつがる市にすごい図書館ができて、そういった市には相応しくないような立派な本屋とカフェが一緒になったものを作ったという。なんでそういうことをしたかという、お金もかかるし大変だったようだが、そういうものを作ることによってつがる市の駅前が活性化して市民の人が本に親しんで賑わう、つまり町の活性化のためだと言う。二つめは、図書館というのは、本を借りて見るとというのが基本は基本だが、図書館にはもっと深い広い機能が期待されている部分もある。例えば、市民の人が図書館に来る、本を借りる、例えば福祉のこと、介護のことで疑問を持ったり悩んだりしていることがある場合、または健康のことで疑問を持ったりしている時、それをいつも図書館にいる職員の人に聞いたり話したりすることができれば、もっといいのではないか。というのも光図書館は一部委託されていて、委託の人たちは窓口できれいに丁寧にそつなく対応はしているが、それ以上のことがこちらからなかなか言えないような面があるのではないか。コンビニの店員さんのようになっているように感じる。市民の人はいろいろな悩みを持っていて、図書館は市

役所の出先機関のようなもの、出張所のようなものでもあり市民の悩みにそっとタッチして対応してもらえる、そういったものを目指すのも図書館ではないか、図書館は町の顔、看板だとか言われ町づくりの最前線だと言っている人もいるくらい、もっと深く立ち入ることができるような内容を図書館につけ加えていく、せっかく立派な施設があるわけだから、そういったものを目指していく必要があるのではないか。昨今でもまだまだ振り込め詐欺のようなものが地域で相変わらず何百億円と被害が出ている。なぜあのようなものが防げないか、一人暮らしの人が多いたか、いろいろあろうが身近なあのようなことを防ぐことがなぜできないか、図書館で何かそういうことに対応してできることがあるのではないか。こういうことを図書館で検討することもあってもいいのではないか、図書館の機能をもっと深く広くしていくように考えることがあってもいいのではないかと考えている。

会長：職員が窓口業務を委託することによって、若干手が空いたとすると、フロアに出て行って市民とコミュニケーションを図る、様子を見て話しかけてみるとか窓口に出ない分を補強していくといったこともやるといいのかなと思う。やはり利用者とのコミュニケーションが一番大事な仕事なので、常連さんに話かけるとか、利用者に職員は自分の名前を覚えてもらったりすることが大事な仕事。そういう意味では事務室の中での仕事も大事なのだが、フロアに出て利用者への声掛けをする、こういうことも大事。

委員：この資料を見てほっとした。3年間評価をしてレベルアップしている。市民のためにやろうとしていることが感じとれる。これは素晴らしいこと。評価だが皆さん少し厳しいのではないか、利用者サービスとか蔵書の件とか運営の件とかものすごく幅広くあるが、数えたら八十数項目ある。このうちAはいくつあるか、53ある、6割位Aだ。運営協議会の評価もほぼ同じ、こんなに多くあると評価は難しい。しかも課題がはっきりしている。それ以外のこともいろいろあるでしょう、老人が9時30分になるとけっこう来るとか、風呂に1週間も入っていないような人が来ているとか、そういうのはここには書いていない。だからサービスとはどこまでやるのかなど、いろいろ諸問題はあるが、日々解決しておられるし、6割強がA評価だということに気持ちよくなった。皆さんもこのことに勇気づけられると思う。もう参加する必要はないのかなとも思うが、そういう所に立って更なる努力をする、日本一、世界一というか、国分寺独自の良さというものに、アピールできるようなものに協力できればと思っている。

委員：一部業務委託で行財政改革の波がきて、立川市でもどうするかということになり、やはりなかなか図書館だけの考え方だけでは貫き通せない、しかたがないところであるが市民利用という点で最終的に判断するのは市民なのでそこはそれでどういうことができるか、国分寺の図書館はどんなものが合っているか、たまたま立川は指定管理者委託でもっと全部委託になっているが、それもそれでいいのかどうか、こ

これは未来永劫進むということではなく、元に戻すことも考えられる。むしろもっといいことを考えることもできる、そういった時に国分寺の図書館ではどうなのかという時にこの運営協議会がサジェスションを与える、もっと国分寺図書館を応援するといった立場で参加したい。最近、市の他の部門でもいろいろ変わってきている。障害福祉課で窓口をやっているのだが、立川では窓口には再雇用や再任用の人達がズラッと並んでいる、窓口はそういった人達が受けて職員は後ろにいて何かあったら出て行く、職員が窓口に出るのは昼休み窓口当番の週1回位だ、年とった人達が窓口をやっているの、そんなに揉めない、揉めないからそれでいいのかな、市役所自体がどういうふうになるのか、実験とは言わないが、いろんなことを試している。これもこれでいいのかどうか、市民サイドの意見で年寄ばかりの窓口でいいのかということや、そうじゃなくて若い人がやっぱりちゃんと覚えてくれないといけないのではないかと、どこにでもあることでこういう流れがあるのかなという気がする。図書館もそうだし行政の総体を考えていけばいい。国分寺の図書館はそんなに規模が大きいということはない、だとすると国分寺なりの方式とかがあって当然なのだ、そういう規模にとっての業務委託はどうあるべきかと考えていく、国分寺色と考えれば、本当に色を決めたらどうか、国分寺の色、市で考えるとちょっと大変だが、図書館でとすればいい、国分寺図書館の色というのを公募で決めて、例えば本のカバーであるとか、チラシとかポスターとか、国分寺図書館の色が例えばけやき色に決まれば、全てそれで整える、統一しろとは言わないが、そういったところでアピールするものができる。公式な話ではないので言うが、色から決めていってもいいのではないか。

会長：やっぱり企業なんかもそうだが、独自色というか、いわばキャラクター的なものとか、これは私のいた調布市の図書館のことだが、50周年を迎えて調布市はメジロが市の鳥なのだが、それをモチーフにして「ジロー」という鳥を作ってそれが必ずどこかに出てくるというふうに、メジロをゆるキャラではないがキャラクターにした。それはかなり広い範囲で受け入れられていったと思う。何かこう特徴的なもの、これを見れば国分寺の図書館だと分かるようなものを皆で考えていくのもいいかなと思うし、また募集してもいいし、いろんな企画ができるのではないかと、今の委員の話を引きかけに何かできればいいかなと思う。

会長：図書館が子ども達の居場所というか、鎌倉市の図書館で子ども達に学校に行きたくなければ、図書館へおいでというアピールをしたことがあったが、そういう面で図書館を考えていくというのも非常に重要なと思う。それは子どもだけでなく、お年寄りも図書館まで足を運んで来てもらうことが、一つの力になって行くということがある。それが心と心を通わすサービスが必要かなと思う。今、長時間開館が求められているので、ある程度正規の職員だけではもうまかない切れな、そうすると全て直営の図書館でも非常勤の職員を雇わざるを得ない。正規職員の2倍位の非正規職員がい

るのが当たり前の状況になっていて、これは図書館だけではなくて、自治体の行政の中でもかなりの非正規職員が働いているという現実がある。で、正規職員を増やせない中で非正規職員が増えてくる、非正規職員を委託にするのか、直営にするのか、その辺の違いくらいしかない。そういうふうな意気込みで自治体職員がしっかりやっければ、専門のノウハウは蓄積されて継続されていく。そういう面ではこれから益々職員の役割は大きくなって行くし、いろいろな意味でマネジメントをするような職員が増えてくる。そういうことではこれから益々図書館の職場は大変になるだろうが、それ以上に夢のある仕事というか楽しい仕事になるということ意識しながらやっっていくのがいいのかな。

副会長：第5期では委託と評価が大きな仕事だった。検証委員会が設けられて会長と出席して長い時間をかけて私達の意見を出しながら、事務局も非常に丁寧に私達の質問に答えて頂き、検証が終わったという経緯がある。それに対してはいい検証委員会になったのではないか。検証委員会の中で、委託業者の方にも来てもらって話をしてもらい直接話をできる機会を設けてもらった。そういうように粘り強く進めてきたという一つの現われが先程の委員さんが言っていたようなことだと思う。それと同時に会長がおっしゃったようにそこに至るまでのやはり光図書館長の努力というか、本当に大変なものがあったと今でも思っている。と同時に委託業者自身ももう何年か前に比べて成長をしているということでもあるのではないか。評価に関しては、第5期は全員の参加の中で、管理部門は座間会長、サービス部門は清水委員がリーダーをしてくださった。また運営協議会とは違った形で小委員会を設けてやったが、ほぼ勉強会に近いような雰囲気の中で行われた。近い距離の中で各委員が評価項目について質問をし、事務局が非常に丁寧に答えてくれた。今まで見えていなかった図書館サービスの奥深い部分、委託もしくは直営に関わらずこれで良いのかというより良い図書館サービスを目指すことが第一義にあり、委員が言ったように図書館は本を貸したり返したりという機能以上にいろいろな期待が今図書館に向けられている。とにかく運営協議会としてどれだけのいろいろなことに関わっていけるのかを常に考えて行きながら、参加していきたい。

会長：今期はまた新たな課題があるようだが、先程事務局の方から基本方針とか運営方針とかがまだしっかりと確立されていないという説明があり、そこからスタートしていくということもあるし、またたまたま西国分寺に都立多摩図書館ができるという。あの図書館はあるサービスに特化している。全体的なことをやるのではなく、例えば児童サービスとかマガジンバンクと言って雑誌を全国で一番多く揃えるという。国分寺としては児童サービスについては新たな市立図書館と都立図書館との連携というか、あるいはここを拠点にした学校との連携とか、いろんなモデルケースができるのではないか。以前は立川にあってその時は地元の図書館との交流は殆どな

かったが、今度ここへ来たらかなり地元を意識したサービスに変わってきているところが見受けられる。私は直接お会いしたことはないが、図書館課長の話を聞くとかなり地元と関わりたいという意欲があって、それを市としても積極的に受け止めて都立図書館と市立図書館の連携の一つのモデルが国分寺で生まれてくるといいかな、これはまた新しい展開になるので、その辺をどういうふうに組み立てていけるか、我々の役割はやはり図書館を地域に広めていくという課題が沢山ある。運営協議会委員の役割は何かということをもう一度考えてもらって、広げていって、そしていろいろなコミュニケーションを得られたらそれをここに持ち寄ってもらって、ここでそういうような議論をしていくのであれば、学校のPTAの中で図書館に対する良い情報も悪い情報も聞いて来て、ここに持ち寄ってこの場に出してもらって協議し、またそれを持ち帰ってもらい、そう言った輪を10人、20人、50人と広げていくといったことを今期は目標にしたいと思う。委員として自分が一人で抱え込むのではなくて、自分が考えていること、悩んでいることをお隣の委員ではない人に話をしながら、広めていく。これが運営協議会を拡大していくということになり、あるいは図書館というものを意識してもらい。ヘビーユーザーではない人にも。利用しない人も多い、登録率も4割いかない。そうすると人口の3分の1は利用していない人達がいる。その人達に図書館を知ってもらい、利用してもらいという大きな役割がある。でこれは図書館職員だけでは対応しきれない、それを市民の中にいる我々がそれをやっていくというのがいいのでは。そういう状態にある人がどう図書館と向き合っていけるかという大きな課題がある。申し訳ないが、国分寺の場合にはまだまだハンディキャップサービスは後発というか、比較的やり得ていないことがかなりあると思う。そういうようなものをどうするか、私はそういう方々にまず図書館を利用してもらい、来てもらうことが大事だと思う。私のいた調布市図書館で視覚障害の人達のサービスを始めたのは後発で国分寺のほうが早いのだが、私も国分寺の職員に教わったことが結構ある。障害を持った人が図書館を訪ねてくれる、それで初めてそういう方と接することができる。接すると何をしなくてはいけないかと図書館の専門職としてある以上、何か考えなくてはいけないということになる。だからまず図書館に来てもらうことが大事なのだ。できるか、できないかは別として、まず来てもらう、職員と接してもらい、そこからいろいろなサービスが生まれてくる。私なんか聴覚に障害のある人達になぜサービスが必要なのかと考えた時もあった。本が読めるのでそんなに特別なサービスは必要ないのではと思った。でも必ずしもそうではなくて、読む力というものがやはり健常者とはかなり違うということを直接本人から聞いて、いろいろな事が分った。いろいろな事が分ってくるので、やはり人と人との触れ合いが分らせることになるし、分らなかったことが見えてくる。皆さん方もぜひ身近な方々を図書館に引き入れていくことが重要。これはまだ館長には相談していないのだけれども、できたら事務局の方で運営協議会の委員さん方の名刺を作って頂くといいかなと思う。自家製の名刺で

いいので、運営協議会の委員と証明できるような名刺を作ってもらってそれぞれに10枚か20枚渡し、それをぜひ委員さんが活用してもらい、こんなことをやっていますと渡すことで、そこからいろいろな話ができる。ちょっと負担かもしれませんが、そんなにお金はかからないと思うので、できればありがたいと思う。

事務局：検討する。

会長：できればカラーも。そこで清水委員の言うカラーが必要だ。そうすると輪が広がっていくと思う。

事務局：都立多摩図書館の内覧会の件、1月25日（水）予定する。次回は決めたら通知する、基本的に火曜日にする。